

小峰城ふもとやま話

第十五話
本丸と本丸御殿

小峰城の中心をなす郭である本丸は、城の北西部、周囲を石垣で囲まれた高台の上に位置しています。現在の本丸跡は広場となっていますが、江戸時代はどんな様子だったのでしょうか。

松平定信時代の小峰城について記録した『白河城御櫓絵図』(下図右)によれば、現在の広場全体に大きな御殿(本丸御殿)が立っていました。また、御殿の南側には長屋のような建物(多門櫓)や、裏門と考えられる桜之門もありました。

本丸御殿は城内で最大の建物で、総畳数707畳とする記録があります。はじめは藩主が住む場所でしたが、時代がたつと二之丸や三之丸に住むようになり、定信の時代には主に家臣との謁見などの儀式を行う場所として使われていたようです。

また、絵図には御殿の間取りや部屋の名前も記録されています。儀式に使う大広間となる「御書院」が南側を占めており、他に食事を作る「御台所」、家臣の執務室である「御奉行」「御月番」、藩主の居室である「御小書院」などがあります。

このように、御殿は多くの部屋をそなえた小峰城の中核にふさわしい建物だったことが分かります。

現在、本丸跡ではかつての本丸御殿のイメージをARで体験できます。現地を訪れたらぜひご利用ください。



▲本丸御殿平面図(「白河城御櫓絵図」より)
(白河市歴史民俗資料館蔵)



▲ARで見る本丸御殿(再現CG)



▲現在の本丸跡広場

※ARは、現地案内板に従いスマートフォンアプリのダウンロードが必要です。

問文化財課 ☎27-2310

渋沢栄一×松平定信

南湖を彩る系譜

第六回
七分積金の活用を
任された渋沢栄一

明治5年5月、寛政の改革で設置された七分積金の運用などを行う町会所が廃止されると、戊辰戦争の戦費や新しい政策のために財政がひっ迫していた明治政府は、七分積金を政府の財源にしようとした。

東京府知事の久保一翁は、この考えに反対し、江戸庶民が積み立ててきた七分積金は東京府民のために使うべきだと主張しました。そうして、七分積金の活用を渋沢栄一に任せました。

大蔵大輔の井上馨と部下の渋沢は、町会所の救済事業を受け継ぐ「営繕会議所」という組織を作り、七分積金を活用しようとした。営繕会議所はやがて、東京府内一般の営繕事業に手を広げていきます。

その後、営繕会議所は「会議所」と名称を変え、営繕事業だけでなく、建設・社会・教育など、さまざまな事業を行うことになりました。



▲大久保一翁
(国立国会図書館ウェブサイトより)

営繕会議所は明治11年に東京商法会議所、同16年に東京商工会、同24年に東京商業会議所、昭和3年に東京商工会議所と変わりますが、渋沢は明治11年から38年までの27年間、会頭を務めています。

この間渋沢は、七分積金をもとにした東京府内の道路・橋の修築、瓦斯燈の設置、商法講習所(後の一橋大学)の設立、東京府市庁舎・墓地の建設、養育院の創設など、多岐にわたる事業に深く関わりました。



▲東京商業会議所
(渋沢史料館所蔵)

※「東京府」は、昭和18年7月1日に「東京都」になりました。



▶芝浜崎町ガス局 歌川広重 東京名勝図会 金杉橋より芝浦の鉄道(部分)
(東京ガス ガスミュージアム所蔵)

(文・中山義秀記念文学館 館長 植村美洋)

お知らせ

ラウンジ

手話

高齢者サロン

リぶらん

シリーズ

子育て

保健

くらしの情報館

休日当番医・無料相談ほか

市長の手控え帖